

ゆき

昭和十九年 集団疎南で雪川が冬田キ口は

とけあんだら基礎打にいた

朝おするとお掃除、雑布でふくと廊下が氷

てしすう、そのまにすずおきて布団をくると

おしすうのほいほゆきが少しつてもいいよ
掃除がババ
かてりて

今より寒かたのかる 毎朝ゆきをけうと

布団をすしす、た、そしてお掃除のまに先登

氷は存じ、近所の川迄行き氷をかつて川の氷

を便用、まわりをぬかたすゆきゆき、その色

そ草のみどりも春の
ゆきだうけだ、
幼い

うおほんが^上に
かさるうさぎをゆきで
く

赤い^{あか}目^めは^{あか}目^めは^{あか}目^め
中さかしたりした
そのうち

くるとして
さぎをく
そのゆき

となくなり
ゆき、
すぐ居る
てし

と思つて
いたが
ここの
ゆきだうけ

この
疎ゆきで
半年くらした

それ
まりゆきと
緑が
なると
思つて
いたが
地

て
で
隣りの
仕事
ある
孫に
ゆきと
あつた

と
か
多く
なる
ゆ
う
あ
る
六
年
の
列
軍
は
時
節

トト前を見るよ年ばかりのオがス夕ス夕と赤い

つら。それかると思ひあはらゆくりあ

く、木下りで身づくろいとし会場で仕事をする

る宿泊をたのむでいいだが後^期とたまなり

と小町の家のとまはるはいりたあま

茶の旨さのよにする

寒い寒い氷期そうだゆきをかこられたあ

女冷たいたよりほかや希望だ、いと朝

まがあまするわがゆきは寒いのだ、